

## ゴミは要らぬ？

川崎市の阿部市長が、東日本大震災で大量に発生した倒壊家屋の木くずなど廃棄物の処分について協力したい旨を表明したところ、同市に2千通を超える抗議の電話やメールが寄せられたとの報道がありました。

川崎市はじめ首都圏の電力は東北が担っているという現状を踏まえ、被災地での大量の廃棄物の処理に協力しようという阿部市長の提案は至極もっともなことであり、そうした広域的な協力無しには災害復興はあり得ないと思います。

にもかかわらず、「川崎が福島の前被曝ゴミを大量に引き受ける」という誤った情報がネット上に流されたということがあったとはいえ、直ちに2千件を超える抗議が寄せられたということについて、非常に残念に思っています。

人体に影響を及ぼすような放射性廃棄物を都心部に持ち込むなどということは、普通に考えればあり得ない話ですが、にもかかわらず、何故このように過剰に反応するのでしょうか。

要は、便利で快適な生活という電気の恩恵には十分浴したいけれど、原子力発電というリスクなことは地方に押しつけておけば良いということなのだと思えます。ゴミは出すけれどゴミ処分場を近くに作ることは反対というのとよく似ています。

そこには、原発と日常背中合わせで生活している人々に対する思いが感じられません。

福島県の人々の苦勞に少しでも寄り添っていこうとするなら、抗議の前に言うべきことがあるのではないのでしょうか。勿論、計画（という名の無計画）停電に対しても文句の言える筋合いではないでしょう。

「暖かい部屋で安逸をむさぼっている者は、カーテンの外側でどれほど寒風が吹き荒んでいようとも関心を持たない（樋口晴彦著「リスクから目を背ける人々」）という言葉があります。原発を都心に持ってくるということは非現実的で、あり得ないからこそ、リスクを共に背負う覚悟が必要なのであり、そうでなければ、新生日本への再建の道筋は厳しいものになるといわざるを得ません。

（塾頭 吉田 洋一）